

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

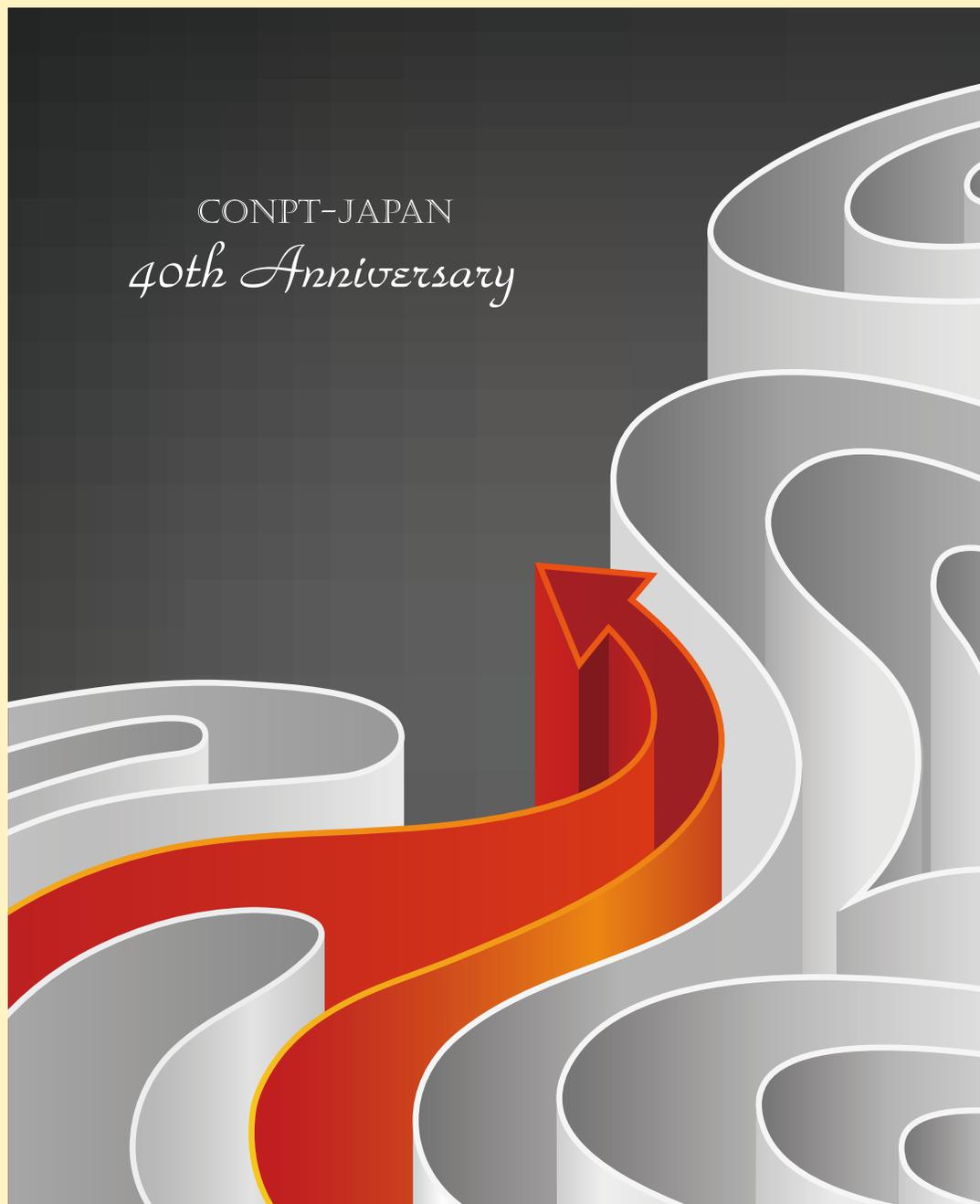
VOL.39 No.3
2015.5.1
(通巻 231号)

日本新聞製作技術懇話会

**創立40周年
記念号**

CONPT-JAPAN

40th Anniversary



目次

ご挨拶	日本新聞製作技術懇話会 会長	芝 則之 ……	3
祝辞	一般社団法人日本新聞協会 会長	白石興二郎 ……	4
	一般社団法人日本新聞協会技術委員会 委員長	木村 泰史 ……	5
CONPT-TOURあの日あの時	日本新聞製作技術懇話会 会長	田中 武夫 ……	6
	日本新聞製作技術懇話会 会友	正田 章 ……	6
CONPT40年の歩み(年譜) ……			7
JANPS2015開幕迫る～所見と意義～	日本新聞製作技術懇話会 企画委員長	矢森 仁 ……	12
新局長に就任して	上毛新聞社 印刷局長	飯島 哲也 ……	13
楽時万歳	下野新聞社 制作技術局長	手塚 昇 ……	14
	日本電気(株) 放送・メディア事業部第一営業部エキスパート	大倉 潤 ……	15
新聞製作技術の軌跡(第5回)	読売新聞社 OB	深田 一弘 ……	16
わが職場あれこれ	西日本新聞社 製作センター技術部長	三嶋 文昭 ……	19
	(株)道新総合印刷 業務本部長	吉田 嗣博 ……	19
第39回国内研修会記 ……			20
第3回CONPT技術研究会開く ……			20
会員消息、セミナー開催のご案内ほか ……			21
会員名簿 ……			22

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

CONPT40歳、新聞の未来を見つめ前進

日本新聞製作技術懇話会 会長
芝 則之



日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)は、この5月に創立40周年を迎えました。

人間で言うなら不惑、壮年期に入ったと言えますでしょう。必ずしも平坦ではなかった40年を振り返り、様々な想いが交錯します。

1975年(昭和50)5月21日、新聞製作技術関連企業が結集してCONPTを立ち上げました。当時の参加は23社、新聞界が隆盛を謳歌していた頃です。きっかけとなったのが72年東京・北の丸の科学技術館での第1回JANPS(新聞製作技術展)でした。その後第2回、第3回と回を重ね、ことに74年には番外ながら「日本印刷機械・包装機械展」と銘打って中国・天津市で開催したのも昔語りです。せっかく関連業界が集ったのにこのままではもったいないとの声が高まり、懇話会設立となりました。故人となりましたが、岡村雄一氏(東京機械)、大澤正氏(日経)、由利和久氏(新聞協会)らが中心となって創立に漕ぎつけ、初代会長に岡村氏が就任、今日のCONPTの活動基礎が出来ました。

*

2年に1度業界挙げてのJANPS、設立当初から毎年欠かすことなく39回開催のCONPT-TOUR、それに遅れて今年33回目となった新聞製作人新年名刺交換会が3大イベントとして始まりました。いずれも日本新聞協会と新聞各社の多大なご協力のもとに毎回盛況を見せており、新聞界とCONPTの強いつながりを感じさせます。中でも最大のイベントJANPSは前回2012年、2年おきから3年おき

にと変わりましたが、来る7月22日～24日には第22回が開催されます。東京ビッグサイトを舞台に出展各社がどんな展示を披露するのか、今から楽しみでもあります。それについても、新聞製作技術の向上・改善を通じて、新聞界の発展にいささかでも寄与しようというCONPT設立のねらいは、十分に果たされているのか常に反芻するところです。

*

この40年間にはさまざまな転機がありました。70年代後半からのCTS化による新聞制作の激変、90年代のタワー型オフセット輪転機でのカラー印刷とCTPでの受信製版などなど。最近のデジタル化は、紙面制作の上流から送信、印刷・発送の下流部門までを大きく変えました。またパソコン、タブレット、スマートホンのデジタル社会が到来し、紙の新聞の大幅減少という状況をもたらしています。業界全体として将来への危機感を抱くのは大事ですが、いたずらに萎縮しているわけにはいきません。2009年リーマンショックを受けた日本経済および新聞界が、苦難を乗り越えたように今後ともCONPT会員各社は切磋琢磨しながら技術の発展向上に励む覚悟です。

デジタル技術全盛ですが、裏を返せば新たなチャンス到来ということでもありましょう。従来の発想を超えたシステム・設備機器・ノウハウを生み出す土壌となります。省エネ、コスト削減、効率化の課題解決のため、新聞界にCONPTが果たすべき役割は小さくはないはずです。紙の新聞が消滅することは決してないと信じ、新たな地平に向け前進します。CONPTの次の10年の歩みにどうかご理解とご支援をお願い致します。

祝40周年

懇話会40周年に寄せて

一般社団法人日本新聞協会 会長

白石 興二郎



日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)の創立40周年を、日本新聞協会を代表して、心からお祝い申し上げます。

懇話会は1975年5月、メーカーと新聞社が一体となり新聞製作技術の改善と向上を図ることを目的に発足しました。

より速く、より多くの読者に信頼できる最新の情報を届けるという新聞の使命は、メーカーの皆様とともに取り組んだ技術革新の成果なくしては全うできません。懇話会発足当時の70年代は、CTSシステムが広がりを見せ始めた時期でした。また、印刷・発送設備の自動化や公害防止なども課題でした。これらの解決に、新聞界と懇話会会員各社が力を合わせて挑戦し、今の新聞事業の姿があります。

*

懇話会設立のきっかけとなった新聞製作技術展(JANPS)は、今夏で22回を迎えます。最先端の新聞関連技術が一堂に会するこの展示会は、技術分野のみならず、編集や経営の分野に携わる新聞・通信社の社員にも参考になり、新聞社の近代化に大きく寄与してきました。今年のJANPSについて、これまで同様のご協力をお願いいたします。

また、懇話会ではCONPTツアーを主催し、メーカーと新聞社のメンバーが参加する視察団を海外に派遣しています。世界新聞・ニュース発行者協会(WAN-IFRA)主催の世界新聞技術展をはじめとした海外の技術展の視察や欧米の新聞社および印刷工場への訪問を通じて、海外のメーカーや新聞社の担当者と直接対話することができる貴重な機会となっています。参加者にとっては、最新の技術動向への理解を深めるとともに、新聞を取り巻く厳しい環境下でのビジネスモデル模索へのヒントをつかむ契機になるものと確信しています。このほか、知識の研さんを目的とする国内研修会や技術研究会も含め、今後とも懇話会の活動をいっそう有意義なものにしたいと願っております。

*

現在は、多メディア時代に即した効率的なニュース発信の技術、環境に配慮した資材や工場の運営、省エネ、コスト削減、災害・障害発生時に新聞発行を続けるための備えなどが新聞・通信社に求められています。また、新聞を取り巻く環境が厳しさを増すなかで、新聞の媒体価値を高める技術の提案が期待されます。

40周年を機に、今後とも、懇話会および会員各社のますますのご発展をお祈り申し上げます。

祝40周年

明日の新聞を支える技術の提案を

一般社団法人日本新聞協会 技術委員会委員長
木村 泰史



日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)の創立40周年、おめでとうございます。日本新聞協会技術委員会を代表して、お祝い申し上げます。

懇話会が設立された1975年は、コンピューターでの新聞制作やオフセット輪転機の導入が広がりを見せ始めた年でした。近年になると、フィルムを使用せず紙面データを直接刷版に描き込むCTPの導入が進展しました。新聞発行の各工程で自動化・省人化を実現し、新聞制作および印刷の現場は大きく変わりました。

一方、新聞社を取り巻く環境も激変、各社は厳しい状況での新聞発行を余儀なくされています。新聞の総発行部数は減少に転じ、世帯あたりの部数も2008年に0.98部と1部を切って以来、減り続けています。インターネットの普及で読者にとっては情報媒体の選択肢が増え、またソーシャルメディアの出現により、誰もが世界中に向けて発信することができる時代になりました。新聞・通信社も多メディア戦略を打ち出し、新聞がこれまで培った信頼を武器に、時代の求めに応じたニュース速報と報道を追求しています。

今、新聞・通信社の技術部門に求められているのは、このような時代に即応できる多メディア対応や、紙を含めた新聞の媒体価値を高め、新たなビジネスモデルを可能とする技

術の提案です。さらに、新聞経営の先行きが不透明ななか、高い品質を維持しながらも、いっそうのコストダウン、効率化を行い、経営に貢献することは技術部門の至上命題です。

版材を減らすことのできる4×1輪転機、インキ使用量を抑えて印面の品質を高める高精細スクリーン、省エネの実現、環境対策、事業継続計画(BCP)、クラウドを活用したシステムの導入などの分野で、これまで新聞・通信社は懇話会会員の皆様とともに、効率化を目指しつつ、次々と新しい技術に挑戦してきました。今後とも、将来の新聞・通信社の活動を支える技術の開発に、ともに取り組んでいきたいと考えています。

*

今年7月に新聞協会は、新聞製作技術展(JANPS)を「未来につなぐ新聞技術-今より明日(あす)へ」をテーマに開催します。紙とデジタル技術との共存を念頭に、議論を重ねて決めたテーマです。JANPSでは、新聞社が抱えている課題の解決や、将来に向けて現状を打開するための手がかりを得ることができればと、期待しています。盛況に迎えることができるよう、是非ともご協力をお願いいたします。また、海外新聞事情視察団、国内研修会や技術研究会など、懇話会の活動をこれまで以上に充実していただけることをお願いしたいと存じます。

最後になりましたが、懇話会ならびに懇話会会員各社のますますのご発展をお祈り申し上げます。

CONPT-TOURあの日あの時

衝撃を受けた第1回米国ツアー

日本新聞製作技術懇話会

会友 田中 武夫



1975年5月、CONPTは東京機械の岡村雄一さんを会長として会員23社で発足しました。マネージャーには日本新聞協会技術コンサルタントの安養寺敏郎さんを迎えました。

た。

当時の様子を上智大学名誉教授の春原昭彦氏の「日本新聞通史」から拾ってみますと、[新聞の復興期(1945～)/新聞の発展期(1955～)/新聞の転換期(1974～)/新聞の役割の変化と課題期(1987～)]の新聞の転換期に当たります。世界の新聞大国として大きな飛躍を始めた頃、と言うことでしょうか。

サカタインクスは発足当初からの加盟社ですが、私は翌年開催の第1回「ANPA機材展・技術会議視察団」に参加しました。添乗員を含め総勢37名、14日間、2万3千キロの旅でした。羽田発のパンアメリカン機でロスに向かったのも、若い方には耳新しく聞こえるかも知れません。ロスからカンザスシティ、デモインを経てロスに戻り、機材展会場はラスベガスでした。訪問先新聞社ではダイリソ輪転機や電子編集システムの視察を行い、大いにカルチャーショックを受けたものでした。

ツアーにはエピソードが付き物ですが、私の場合は、ラスベガスのホテルに到着と同時にカジノに向かい、30分余りで円換算3万円ほどを稼ぎ、その足でホテル直営のゴルフ場に直行した忘れ難い思い出があります。ツアー参加者の一人ひとりがそれぞれ珍道中の話

題を抱えていたのではないのでしょうか。

思い出深い体験には人の触れ合いもありました。1982年の第7回視察団でご一緒した中国新聞社の尾形幸雄さんとの交流、岡村さんの後にCONPT会長を務められたNSGの原哲夫さんとの交流なども忘れられません。

さて、CONPTは企画、クラブ、広報の三つの委員会で構成されています。私は広報委員長を数年担当しました。CONPTはこの委員会活動を通じてJANPS、CONPTツアー、国内新聞社見学、広報誌発行などを運営してきたわけですが、こうした行事を継続することで今後とも日本の新聞製作に寄与されることを祈念して止みません。

CONPT-TOURを5回経験

日本新聞製作技術懇話会

会友 正田 章



日本新聞製作技術懇話会の創立40周年心よりお喜び申し上げます。

この間の新聞製作技術の変革(凸輪からオフ輪へ)に懇話会が果たした功績は多大なものです。

新聞社の皆様とベンダーの我々との交流をJANPS、CONPT-TOURが果たしてくれた役務は大変大きかったと思います。私個人としてはその渦中に入れたことが私の人生を豊かにしてくれました。本当に有難うございました。

私はCONPT-TOURの第1回から参加するチャンスがあったのですがタイミングが合わず1回も参加しないで退職の年を迎えました。その間、参加した方々から充実して、楽

しいTOURである事を聞かされ羨ましく思っておりました。

2006年に退職する事が決まり、懇話会の会友に推挙されましたので、第31回欧州新聞製作事情視察団に退職記念にと思い参加させていただきました。期待通りの研修内容で参加者の皆様と友好関係が出来、本当に楽しい研

修旅行でした。

その後、第32回・第33回・第34回・第35回・第37回CONPT-TOURを5回経験しましたがいずれも期待通りの内容で楽しい研修旅行でした。

これからも懇話会が素晴らしい研修旅行を企画される事を願っています。

CONPT40年の歩み(年譜) 昭和50年～平成27年

昭和50年～平成6年は「20年の歩み」として111号、112号に、平成7年～11年は「25年の歩み」として141号に、平成12年～16年は「30年の歩み」として171号に掲載いたしましたので今回は略述しました。

◆年表(1975～2004)

昭和50年(1975)

- 4.1 懇話会発足(発起人15名)
-新聞協会内に仮事務所-
- 5.21 設立総会開く(会員23社)-会則、役員、委員、マネージャーを承認
会長に岡村雄一氏就任



- 9.9 第3回JANPS開く(出展30社、入場者数 13,000人、於科学技術館)

昭和51年(1976)

- 4.26 第2回定時総会
-英文会社名ほか決定
「Conference for Newspaper Production Technique JAPAN」
略称: CONPT-JAPAN
- 5.27 第1回米国新聞製作事情視察団(参加者37名、14日間)
- 8.1 クラブルームをプレスセンターに設置

昭和52年(1977)

- 1.1 会報「CONPT」第1号を発行

- 1.8 新年名刺交換会開催(会員社)

昭和55年(1980)

- 5.9 創立5周年記念パーティー開催
(於日本記者クラブ宴会場)
- 11.11 第1回国内研修会開催
～12 (信濃毎日新聞社長野・松本両本社見学、参加者30名)

昭和56年(1981)

- 9.11 第1回技術懇談会(参加者22名)
-日本新聞協会、技術開発特別委員会との懇談会-

昭和58年(1983)

- 1.14 初の新聞製作人新年合同名刺交換会を新聞協会と共催(於日本記者クラブ宴会場、約150名参加)

昭和59年(1984)

- 7.2 CONPT TOUR全参加者再会パーティー(於日本記者クラブ宴会場、延べ参加者400名のうち135名出席)

昭和60年(1985)

- 5.8 創立10周年記念パーティー開催
(於日本プレスセンターホール)

昭和62年(1987)

- 11.13 第9回JANPS開催、会場を晴海・～17 国際貿易センターに移す

平成2年(1990)

5.24 創立15周年パーティーを開催
(於日本プレスセンターホール)

平成3年(1991)

11.17 第11回JANPS開催、会場を千葉・
～21 幕張メッセに移す

平成4年(1992)

事務局マネージャー安養寺敏郎氏
退任、門倉浩一氏就任

平成7年(1995)

5.21 創立20周年記念パーティー開催
(於日本プレスセンターホール)

平成9年(1997)

事務局マネージャー門倉浩一氏退
任、佐久間悌氏就任

11.24 第15回JANPS開催、会場を東京ビ
～27 ッグサイトに移す

平成12年(2000)

5.19 創立25周年記念パーティー開催
(於レストラン・アラスカ)

平成13年(2001)

5.18 会長に原哲夫氏就任

11.13 第16回JANPS開催
～16 この年から非加盟社も出展(6社)
最終日に第1回CONPTセミナー開
催

平成15年(2003)

5.22 会長に芝則之氏就任
事務局マネージャー佐久間悌氏退任、
酒井寛氏就任

◆年表(2005～2015)

平成17年(2005年) 会員社総数55社

1.14 第23回新聞製作人新年合同名刺交
換会(340名出席)

3.18 創立30周年記念講演会—講師：経
済同友会・代表幹事・北城恪太郎
氏(90名参加)

4.7～8 第87回技術懇談会(23名参加)
—NTTクオリスと愛知博見学会—

5.13 第31回定時総会

5.13 創立30周年記念パーティー開催(於
日本プレスセンターホール、200名
参加)



6.2 第88回技術懇談会(50名参加)
—NEXPO報告会—

6.12 創立30周年記念研修会(16名参加)
～14 —東亜日報社、朝鮮日報社、国民
日報社見学会—

10.11 第30回欧州新聞製作事情視察団
～22 (参加者34名、12日間)

11.15 第18回JANPS開催
～18 (出展社54社、入場者数延21,690人)

11.18 第3回CONPTセミナー「CONPT—
TOUR2005に見る欧州新聞事情と
IFRA展」(於東京ビッグサイト・
レセプションホール、210名参加)



12.2 第89回技術懇談会(28名参加)
—NTT横須賀通信研究開発センタ
—&日本新聞博物館見学会—

12.8 第31回年末全体会議

平成18年(2006年) 会員社総数53社

1.13 第24回新聞製作人新年合同名刺交
換会(330名参加)

2.24 第27回国内研修会(34名参加)
～25 —日経西部製作センター見学会—

5.16 第90回技術懇談会(50名参加)
—NEXPO・IPEX報告会—

5.26 第32回定時総会

6.2 第28回国内研修会(25名参加)
～3 - 中国新聞広島制作センター見学会 -

10.3 第31回欧州新聞製作事情視察団
～13 (参加者39名、11日間)

11.27 第91回技術懇談会(80名参加)
- CONPT - TOUR2006報告会 -

12.7 第32回年末全体会議

平成19年(2007年) 会員社総数51社

1.12 第25回新聞製作人新年合同名刺交換会(320名参加)

2.6 第92回技術懇談会(24名参加)
- 下野新聞印刷センター見学会 -

4.12 第93回技術懇談会(26名参加)
- 高橋繁氏、畠山恵一氏への感謝の集い -

4.20 第29回国内研修会(29名参加)
～21 - 岩手日日新聞社見学会 -

5.23 第94回技術懇談会(65名参加)
- NEXPO2007報告会 -

5.25 第33回定時総会

6.1 第95回技術懇談会(57名参加)
- 京都新聞社見学会 -

9.4 第96回技術懇談会(35名参加)
- 日経東京製作センター・川崎工場&日本新聞博物館見学会 -

10.1 第32回欧州新聞製作事情視察団
～12 (参加者31名、12日間)

11.6 第19回JANPS開催
～9 (出展社57社、入場者数延20,295人)



11.8 第1回CONPT - TOUR合同再会パーティー開催(於: 東京ビッグサイト、レセプションホール、245名参加)



11.9 第4回CONTセミナー「CONPT - TOUR2007に見る欧州新聞事情と世界動向」(於東京ビッグサイト・レセプションホール、224名参加)

12.5 第33回年末全体会議

平成20年(2008年) 会員社総数50社

1.11 第26回新聞製作人新年合同名刺交換会(310名参加)

5.16 第97回技術懇談会(65名参加)
- NEXPO2008報告会 -

6.5 第33回欧州新聞製作事情視察団
～15 (参加者32名、11日間)

6.26 第98回技術懇談会(30名参加)
- 毎日新聞首都圏センター&国民生活センター見学会 -

7.16 第99回技術懇談会(91名参加)
- CONPT - TOUR2008並びにdrupa2008報告会 -

9.19 第31回国内研修会(20名参加)
～20 - 北海道新聞社・釧路工場&日本製紙釧路工場見学会 -

10.26 IFRA Expo2008 TOUR
～31 (参加者28名、6日間)

12.4 第100回技術懇談会(130名参加)
- 100回記念講演会&IFRA Expo報告会 -



12.18 第34回年末全体会議

平成21年(2009年) 会員社総数50社

1.9 第27回新聞製作人新年合同名刺交換会(300名参加)

- 4.21 第101回技術懇談会(45名参加)
-産経新聞・千鳥工場見学会-
- 5.22 第35回定時総会
- 7.16 第32回国内研修会(17名参加)
~17 -読売新聞尾道工場見学会-
- 8.29 クラブルーム移転。
- 10.8 第34回欧州新聞製作事情視察団
~16 (参加者25名、Aコース9日間、Bコース6日間)
- 11.12 第102回技術懇談会(25名参加)
-朝日新聞社日野工場見学会-
- 11.24 第20回JANPS開催
~27 (出展社48社、入場者数延15,533人)
-産経新聞社が新聞社として初出展-
- 11.26 第2回CONPT-TOUR合同再会パーティー開催(於レストランニュートーキョー、194名参加)
- 11.27 第5回CONPTセミナー「CONPT-TOUR2009に見る欧州新聞事情と新しい潮流」(於TFTビル、160名参加)
- 12.21 第35回年末全体会議

平成22年(2010年) 会員社総数46社

- 1.8 第28回新聞製作人新年合同名刺交換会(290名参加)
- 3.22 WAN-IFRA主催 STUDY TOUR
~25 (東京、静岡、名古屋、京都)
- 5.21 第103回技術懇談会(23名参加)
-上毛新聞印刷工場見学会-
- 5.26 第36回定時総会
創立35周年記念パーティー開催(於日本プレスセンターホール、120名参加)



事務局マネージャー酒井寛氏退任、徳永正裕氏就任

- 6.18 第33回国内研修会(14名参加)
~19 -北海道新聞函館工場見学会-
- 7.9 第104回技術懇談会(48名参加)
-IPEX展報告会-
- 9.1 第105回技術懇談会(19名参加)
-東京証券取引所見学会-
- 10.3 第35回欧州新聞製作事情視察団
~9 (参加者27名、7日間)
- 11.5 第106回技術懇談会(44名参加)
-CONPT-TOUR2010報告会-
- 11.19 第34回国内研修会(14名参加)
~20 -岐阜新聞社見学会-
- 12.13 第36回年末全体会議
第107回技術懇談会(68名参加)
-酒井寛氏への感謝の集い-

平成23年(2011年) 会員社総数45社

- 1.7 第29回新聞製作人新年合同名刺交換会(290名参加)
- 5.27 第37回定時総会
- 7.21 第108回技術懇談会(26名参加)
-読売新聞木場工場並びに江戸東京博物館見学会-
- 10.9 第36回欧州新聞製作事情視察団
~16 (参加者24名、8日間)
- 11.11 第35回国内研修会(15名参加)
~12 -新日本海新聞社製作センター&グッドヒル見学会-

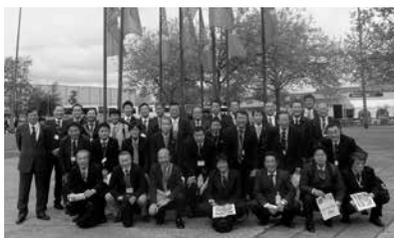


- 11.18 第109回技術懇談会(57名参加)
-CONPT-TOUR2011報告会-
- 12.5 第37回年末全体会議

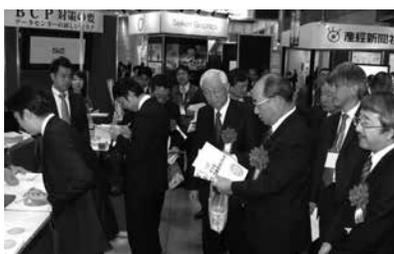
平成24年(2012年) 会員社総数41社

- 1.13 第30回新聞製作人新年合同名刺交換会(290名参加)

- 5.9 第37回欧州新聞製作事情視察団
～17 (参加者35名、9日間)



- 5.30 第38回定時総会
6.15 第36回国内研修会(19名参加)
～16 - 佐賀新聞社見学会 -
7.6 第110回技術懇談会(94名参加)
- CONPT - TOUR2012報告会 -
10.28 IFRA Expo2012 TOUR
～11.2 (参加者18名、6日間)
11.27 第21回JANPS開催
～29 (出展社60社、入場者数延12,589人)
大学・研究機関(6団体)初出展
展示会場内にセミナーゾーン設置、
出展社によるセミナー開催



- 11.28 第3回CONPT - TOUR合同再会パ
ーティー開催 (於THE BIG LOUN
GE、176名参加)
11.27 第6回CONPTセミナー
～29 (3日間開催、計176名参加)
12.12 第38回年末全体会議

平成25年(2013年) 会員社総数42社

- 1.11 第31回新聞製作人新年合同名刺交
換会(90名参加)
5.24 第39回定時総会
6.21 第37回国内研修会(22名参加)
～22 - 高知新聞まほろばセンター見学
会 -

- 9.13 第111回技術懇談会(18名参加)
- ANA機体メンテナンスセンター
見学会 -

- 10.6 第38回欧州新聞製作事情視察団
～12 (参加者30名、7日間)

- 11.1 第112回技術懇談会(78名参加)
- CONPT - TOUR2013報告会 -

- 12.16 第39回年末全体会議

平成26年(2014年) 会員社総数43社

- 1.10 第32回新聞製作人新年合同名刺交
換会(300名参加)

- 2.21 第38回国内研修会(20名参加)
～22 - 愛媛新聞印刷センター見学会 -

- 5.9 第1回CONPT技術研究会
(40名参加) - 災害に対応する自家
発電設備 -

- 5.16 第40回定時総会

- 7.3 第113回技術懇談会(32名参加)
- 山梨日日新聞社・韮崎新聞印刷
センター見学会 -

- 7.11 第2回CONPT技術研究会(29名参
加) - ICTによるスマートタウン -

- 9.25 第39回米国新聞製作事情視察団
～10.2 (参加者39名、8日間)

- 11.14 第114回技術懇談会(91名参加)
- CONPT - TOUR2014報告会 -

- 12.8 第40回年末全体会議

平成27年(2015年) 会員社総数40社

- 1.9 第33回新聞製作人新年合同名刺交
換会(320名参加)



- 2.20 第39回国内研修会(25名参加)
～21 - 信濃毎日新聞塩尻製作センター
見学会 -

- 3.6 第3回CONPT技術研究会(58名参
加) - トップランナーモーター

JANPS開幕迫る～所見と意義～

日本新聞製作技術懇話会 企画委員長 矢森 仁



本年は、日本の新聞技術の祭典である第22回新聞製作技術展JANPS2015が開催されます。前回開催から早や3年が経過。その間日本の新聞市場も大きく変化してきました。

新聞という公的メディアの報道の真価を問う論議や消費税増税に対する減税要請。報道の基幹産業である新聞が大きく注目を浴びました。更に高齢化や文字離れでの無読層の増加など、読者層も変化しました。然しながら、如何に環境が変化しても、新聞報道が信頼されるべき情報ソースである事には変わりなく、将来に亘って新聞発行を継続してゆくのが業界関係者の使命であると確信いたします。

本年のJANPSは真夏の7月22日(水)から24日(金)の3日間開催されます。幕張メッセから東京ビックサイトに移転してきた大展示会、東京モーターショーとの時期調整など幾多の障壁を乗り越えての実施となります。国家の情報基幹産業である新聞メディアの活性化の為、次世代に向けた新聞への新たな技術を革新すべく、JANPS2015を開催いたします。今回はJANPS2012で培った新たな施策の内、「新聞社の出展」「研究レベルの先端技術の紹介」「特設セミナー開催」の3つを継承し、前回以上に充実した内容で展開していこうと思います。

【出展の状況】

4月末日現在、新聞関係7社19コマ、会員社33社245コマ、非会員社8社15コマの合計48社279コマの申込みがありました。特別セミナーの申し込みも完了し、20社28コマとなりました。厳しい市況を反映してか、前回よりは固縮りとなりましたが、お陰様で展示会は成立いたします。

【新聞社の出展】

朝日新聞社、読売新聞社及び読売システック、産業経済新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社の各社より申し込みがあり、主催者である日本新聞協会を含めて7社19コマの申し込みとなりました。前回同様中央入口付近の中央通りである「新聞社通り」に配置し、来訪客が盛り上がるよう配慮いたします。又、次世代読者である子供たちが新聞製作に触れられるコーナーも検討されています。

【研究レベルの先端技術の紹介】

前回展示協賛された、千葉大学、東京工芸大学、東京電機大学所属の研究室や、日本プリンテイングアカデミーに参加を呼び掛けています。大学教授や学生が、展示会出展の新聞社やメーカーと交流できるようブース位置やレイアウトを配慮いたします。

【特別セミナー開催】

前回、80席のセミナーブースを設置し2分割で運用しましたが、スペースや音響、場所の問題が課題となりました。今回は設置場所を配慮し、席数もAゾーン100席、Bゾーン50席と拡大すると共に、集客数に応じた場所の提供を行います。既に初日22日(水)はABゾーン合計12プログラム、23日(木)は合計6プログラム、最終の24日(金)は合計12プログラムを計画し、ほぼセミナー講師社の申し込みも埋まった状況です。上記の通りにて着々と準備は進めており、5月の全体会議にて基本計画を確定。出展社各社に通知の運びとなります。これから終盤の追い込みにかかりますが、是非皆様の積極的なご支援で展示会を成功させたいと思いますので宜しく願います。東京五輪も近づきつつあります。JANPSを新聞業界、メディア市場活性化の起爆剤としようではありませんか。

新局長に就任して

輪転機の鼓動伝えたい

上毛新聞社 印刷局長

飯島 哲也



15年ほど前の春、まだ吐息が白くなるような寒い朝に高崎の機関車庫を訪れたことがある。信越線を37年ぶりに走る蒸気機関車の試運転を取材するためだ。静態保存された蒸気機関車は何度も目にしていたが、火室に火が入った蒸気機関車を間近に見るのは初めて。胸を躍らせながら車庫に入ると堂々とした「D51 498」が発足の準備をしていた。

朝日が差し込む車庫で小気味よく動き回る作業員たち。車輪や機器類を次々と点検し、車体を丁寧に磨き上げていく。まるで毛づやの良い競走馬のように、黒く艶やかな輝きを増すD51。作業員が熱い思いを込め「しっかり頑張ってこいよ」と、急こう配の鉄路に向かうD51にエールを送っているのが伝わってくる。

それに応えるように冷たく張り詰めた空気を切り裂き、D51が「シューッ」と大きな音を立てて蒸気を吐き出す。立ち込める白煙とかすかな振動。D51の呼吸や鼓動が胸に迫ってくるようで、鋼鉄製の機関車に生命力を感じた光景が忘れられない。

*

機械に「生命」を与えるのは人々の熱い思いなのだ、と改めて感じたのは小惑星探査機「はやぶさ」の帰還だった。

群馬県富岡市に拠点を置く企業が開発、製造したはやぶさの回収カプセルが、60億キロの長旅を経て地球に戻ってきた2010年6月。ビッグニュースに群馬県内も大いに沸きあが

った。

地球にたどり着くまで苦難の連続だった。エンジンの不調や通信途絶一。絶望を乗り越え、地球を目指したはやぶさが多くの人に感動を与えたのは、やはり飛行の困難に立ち向かったスタッフとともに、開発段階から壮大な計画に取り組んだ人たちの情熱が、はやぶさに魂を吹き込んだからに違いない。

*

昨年春、編集局から印刷局に異動となった。かつて前橋市の本社に印刷工場があった時は外勤記者、整理の面担として降版後に度々、輪転機の脇で刷り出しを待ち構えたものだ。轟音が響き、無事に印刷が始まるとホッとしながら、刷り上がったばかりの新聞をめくる。かすかだが温かさが手に伝わってくるように感じたことが懐かしい。

現在の印刷工場は本社から15キロほど離れた伊勢崎市に移転して6年目、輪転機が入れ替わり、環境も大きく変わった。赴任するまで、ほとんど新工場を訪れたことはなかったが、今、轟音を上げる輪転機の前に立つと、旧工場と変わらず強い鼓動を感じる。

輪転機は印刷するだけの機械だ。だが、記者や印刷部員だけでなく新聞制作に携わるすべての人たちの思いが輪転機を回し、社会の深層や多くの人々の心を紙面に刻んでいる。蒸気機関車が鉄道ファンの夢を乗せ、はやぶさが宇宙のロマンで心を掻き立てたように、輪転機もまた熱いハートを伝えている。

インターネット隆盛となる一方、新聞離れが言われて久しい。しかし、幅広く深い情報を提供したり、社会を俯瞰する手助けをするのは新聞の得意技。新聞にしかできないこと、新聞だから伝えられることはたくさんある。ぬくもりある紙面を読者に届けるため、輪転機の鼓動を守り続けていかなければと思っています。

樂事万歳

ゴルフ仲間から学ぶ妻孝行

下野新聞社 制作技術局長

手塚 昇

栃木県と言えば、日光市を思い浮かべる方も多いと思いますが、栃木はゴルフ場の数も全国3位です。そんな恵まれた所に住んでいて、ゴルフを始めたのは40歳を過ぎてからでした。友人に誘われゴルフ練習場に行ったのがきっかけでした。止まっているボールを打つ簡単な“遊び”と思っていましたが、始めてみるとこれがやっかいな遊びでダフリ、トップの連続で中々思うように当たりません(今でもそうですが)。一緒に回っている人たちや後続組に迷惑をかけまいとTVのレッスン番組やゴルフ雑誌などを見て色々勉強して、自分ではそのようにやっているつもりだが、結果はいつも同じです。プレー後は「グリーンが…、風が…」と言い訳けし、最後はクラブが悪いと買い換えたりもしましたが、そう簡単にナイスショットは出てくれません。車の運転とゴルフは“飛ばせばいい”というのではなく、周りに迷惑をかけず、無理をせずに安全、安心を心がける事がなりよりと分かりました。

*

そんなゴルフ下手な自分が10年以上も続けているのは、ゴルフで多くの友人たちと出会えたからです。友人たちは60歳を過ぎた方が多く、職業は新聞業界とは無縁の住宅や電気工事関係者などさまざまです。中には自営業の方もいらして、小さい会社ながらも何十年と会社を経営してきた人の話は楽しく、新鮮でサラリーマン人生の自分にとって大変参考になります。

雑談の中でよく出てくるのが、定年後の夫婦の話であります。「夫は、今まで家族のために一生懸命働いてきて、定年退職後は、旅

行など好きなことをして第2の人生を楽しもうと考えている人がいるが、妻は何十年も家庭を守り、子育ても一段落しやっと自由な時間を謳歌しようと考えている。趣味などで生活スタイルが出来上がっている妻は、今までのように旦那に振り回され、自分の楽しい時間を奪われたくないと考えているはず。いまさら、退職して暇になったからと家庭のことに色々と言出しされたり、家に居て3度の食事を作らされたのでは…。遊ぶのもいいが少しは相手のことも考えて行動すれば、定年後の生活も楽しく暮らせる」と言われます。

確かに、妻もゴルフも思うようにならないが、この友人達との出会いは「一生の宝物」と信じて大切にしていきたいと思っています。

「仕事、酒、ゴルフ」などと、外の付き合いを優先し、余り家庭を顧みずサラリーマン人生を楽しんでいる方は、少しは奥さん孝行をしておいた方が良くもかもしれませんね。日光は知っているが、栃木県はどこ？と思われた方は、ゴルフ場以外にも鬼怒川や那須塩原など観光地や温泉地が多数あり、家族で楽しめますので是非いらしてください。



我が家の愛車に遊びにきた雉

今年も自宅周りに、雄の雉が現れ縄張りを主張しているのか、雌を呼んでいるか分からないが、「ケンケン」と鳴いています。何度も雌にアプローチしては、逃げられ、また追いかけている姿は、人間の世界と重なるものがあります。しかし、もう少しすると可愛い子供たちが並んでよちよち歩く姿が見られます。

贅沢な？趣味 おやじライダー

日本電気(株)

放送・メディア事業部第一営業部エキスパート

大倉 潤

オートバイに乗っています。20歳のときに免許を取りかれこれ30年。お陰様で大きな事故を起こす事もなく今も乗り続けています。

若いころは週末のたびに何処に行くにも、それこそ台風でも無い限りバイクに乗っていましたが、最近では気候のちょうど良い晴れた日に、ツーリングに行くのが主な乗り方になっています。このため年間10日間乗るかどうかの体たらくで、そのために税金も保険もかかる贅沢な趣味になっています。

バイクには大きく分けて二つの種類があります。一つはアメリカンタイプというハーレー・ダビットソンに代表される両手、両足を前に投げ出す姿勢で乗車して、長い直線道路を巡行するのに適したバイク。最近では若い女性がハーレーに乗っている姿もよく見ます。そしてもう一つはヨーロピアンタイプという平均速度の高いヨーロッパで生まれた前傾姿勢で乗車し、高速道路、山道を走るのに適したバイクです。

おのずとバイク乗りはどちらかのタイプのバイクに乗るわけですが、不思議なことにあまり両方のタイプを行き来する人は無く、ほとんどの人はどちらかに固定されたバイクタイプを送っています。

ちなみに私はヨーロピアンタイプのバイクに乗っていますが、歳とともに前傾姿勢が苦痛になり今ではそれほど前傾がきつくないバイクに乗っています。仲間には前傾がきついスポーツバイクに乗るためにジムに通っている猛者もいて頭が下がります。

なぜヨーロピアンバイクは前傾姿勢なのか？高速道路で風の抵抗を弱めることももちろんですが、一番の目的は体重移動をしやすくして山道を軽快に駆け抜けるためです。車

もほとんど走っていないような山道を走っていると日頃のストレスもすっかりなくなります。

休みの日に思い立って一人でぶらっと北関東や伊豆方面に出かけることもあるのですが、バイクに乗り始めた頃から同年代が集うツーリングクラブにも入っており、その仲間とのツーリングにも時々参加しています。

以前は休む間も惜しんで、ただひたすら山道を走っていたのですが、ここ数年は行き先にうまい昼飯と温泉がかかせなくなっておりその土地の美味しいものと名湯をめぐるツーリングが主になっています。

それでも山道を外すことは出来ず、おやじたちが人も知らない山道を一生懸命走ってはあのコーナーが良かったあの、難しかったあの休憩場所で喧々諤々やっています。

*

バイクはスポーツなのか？難しいところですが車と違って風を全身で感じることに乗ることに体力と気力が必要なところは立派なスポーツのような気がします。

なにしろ道路に砂利でもあれば転倒してしまう可能性があるため、一瞬たりとも気が抜けません。状況判断と反射神経は老化防止になるのではないかと考えています。

最近、仲間ともいくつまで乗れるのか？という事が話題に上ります。以前は50歳になってバイクに乗っているとは想像もできませんでした。ツーリングに行くと私なんかより相当先輩の方がハーレーなどに乗っている姿を見かけることがあり勇気づけられます。いつまで乗れるのかはわかりませんが体力が落ちたら小さく、軽いバイクに乗り換えるなどして出来る限り長くこの贅沢な？趣味を続けていきたいと思います。



太平洋戦争終結までの新聞製作技術

その5 紙型鉛版

今回は活版方式との繋がりやの良さ、製版速度、使用後の版は再溶解してリサイクルが可能なことなどの利点から、長期間、凸版輪転機の刷版製作方式として使用された紙型鉛版法を取り上げる。

紙型鉛版方式のはじめ

発行部数が増加し、所定の時間内に印刷するために印刷機を増やすと、同じ版がその分必要となる。そこで考えられたのが組版からの複製方式だ。18世紀前半から母型として石膏型などが試みられたが実用性に乏しかった。しかしこれにヒントを得たフランスのジュノーが1829年に紙製の母型、すなわち紙型に鉛合金を鑄込んで複製版を得る方法を完成した。この方式を紙型鉛版法と呼ぶ。

54年には米国のクラスケが紙型を湾曲させ、ニューヨーク・ヘラルド紙のために初めて輪転機用の半円筒状の丸鉛版を作った。

日本では75年(明8)頃、太政官印書局が初めて紙型鉛板法の実用段階に漕ぎつけ、民間では76年11月に読売新聞の古井多助が様々な実験を重ねた末に実用化に成功した。ただこれらの鉛版はロール印刷機用の、活字組版の平らな複製版(平鉛版)であり、後の輪転機用の丸鉛版ではない。なお平鉛版は置き置き広告や、県版共通記事の箱組の複製版(第2原版)として活版時代のほぼ最後まで利用された。

当初の日本の紙型は、各新聞社が自製していた。非常に薄くてなめらかな雁皮紙と、柔らかくて強い地氈紙などを数枚ずつ糊で貼り合わせ、さらに鑄造後の鉛版との剝離を容易にするため、表面に離型剤として雲母の粉末などの薬剤を塗布して作成した。特に糊と表面の薬品の調合は、各社の秘伝ともいえるべきものであったらしい。このような紙型は多量に水分を含み、柔軟性があるので、後に「湿

式紙型」と称された。

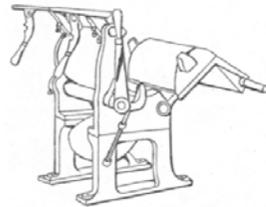
湿式紙型による紙型製作は、鉄枠(チェース)に固定した組版に雁皮紙を下に紙型を乗せ、その上に湿した綿布を乗せて、長い柄の



湿式紙型製作用の刷毛

着いた豚毛の大型ブラシ(刷毛)などで叩く「ハケ打ち」で型取りをした。紙型を破損せずに微細な網点や活字の間に紙型を入り込ませるために微妙な力加減を要するこの作業にはかなりの熟練を要したという。この作業形態から、この紙型を「叩き紙型」とも呼ぶ。その後の工程は、非画線部となるところに厚紙などを貼って補強し、組版ごとコピーと称する平圧印刷機と似た構造の加圧式乾燥機に入れて、下部の定盤を直火や蒸気で加熱しながら紙型を乾燥して仕上げる。

当初の丸鉛版の鑄造は、手で鑄型を開閉する方式の鑄造機に、ヒシヤクで溶融した鉛地金を汲みいれて作業していた。



手動式鉛版鑄造機(雄型を開いた状態)

「高速度輪転機」導入と紙型鉛版方式の進展

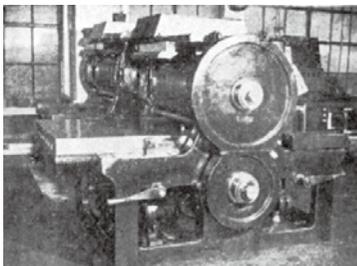
手作業が主体であった日本の紙型鉛版方式も大正末頃からの「高速度輪転機」の導入とリンクして進歩して行った。輪転機が高速化しても鉛版の作成に手間取っては生産性が上がらないからだ。

紙型も従来のような叩き紙型では耐久性、生産性に問題が生じてきたことで、1929年(昭4)頃からメーカーが作成する「ドライマット」と呼ばれる既製品が使用されるようになって

た。従来の紙型(湿式紙型)に比し、含有水分が少ないため「乾式紙型」と呼ばれる。これは十数枚の薄紙を梳きあわせて、表面に耐熱性と平滑性を与えるコーティングを施したもので、メーカーからの納入後、新聞社側で加湿、熟成してから使用した。

ドライマットを使用して組版の型を取る加圧装置は、上下2本の大型ローラー間を往復する定盤に組版と紙型、さらにクッション材のコルク板を乗せてローラー間を通して加圧するローリングマシンと、水圧などを利用する平圧式の加熱圧搾機(水圧を利用するハイドロリック・プレスが大部分であった)が使用された。

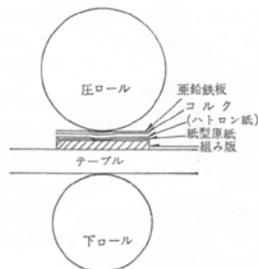
ローリングマシンは、大阪毎日が米ホー社の輪転機を初めて輸入した22年(大11)に、同時に同社から購入した小型機が最初のようなが、本格的に使用を開始したのは系列の東京日日で、29年(昭4)からであった。同社は翌30年には、その後の国産ローリングマシンのひな型となった米ゴス社の大型機を買い入れ、完全にドライマットに転換した。



ローリングマシン(写真は2台を並置したもの)

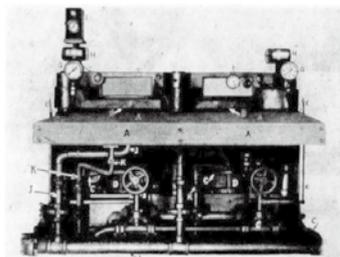
この方式は10～20秒ほどで加圧できるので、場所を取る加圧装置の台数は少なくて済む。しかし、加圧後の紙型は乾燥機で3～4分ほど水分を除去するの必要があり、その際に3%近く収縮が生ずるのは避けられない。結果として紙面上では組版よりも小さくなってしまふ。広告料金は組版の寸法で計算されていたため、当初は紙面上で縮んでしまうことを広告主に納得してもらうのに営業担当者が

大変苦労したという。



ローリングマシンによる紙型作成例

平圧式は湿式紙型の乾燥に使用されていたコピーの延長線上にあるもので、上下の定盤の間にドライマット、ネル布、吸い取り紙を重ねた組版を入れて、下の加熱定盤を水圧等で上昇させて2分ほど加圧した後に圧力を下げる。これは圧と熱で活字がダメージを受けるのを防ぐためだ。5～10分ほどで紙型は完全に乾燥する。この方式は組版と密着したまま乾燥するので紙型の収縮が少なく済むのが特徴。後に平圧方式でも加圧工程のサイクルタイムの短縮を図ってか、加熱せず常温で加圧して、その後乾燥機にかけるコールドプレス法も行われた。

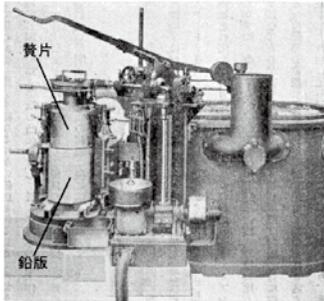


平圧式加熱成型機

どちらの方式も一長一短があり、戦前の大手紙では朝日は平圧方式、毎日はローリング方式が主流であったが、戦後は各社ともローリング方式が一般的になった。

一方、鉛版の技術革新を見て行くと、マリノニ機導入当初は手鋳込みで作成していた鉛版作成は、地金の注入にポンプが使用されるようになった。そして1928年(昭3)には「高速度輪転機」の導入に合わせ、大阪毎日に米ウ

ウッド社の半自動鉛版鑄造機ジュニア・オートプレート(毎分2.5版)が、31年(昭6)には大阪朝日にウッド社製の全自動機のフル・オートプレート(毎分4版)が輸入された。ジュニアは鑄型の開閉、ポンプのハンドル操作のみ手動であるが、基本的構造は両者とも同様だ。

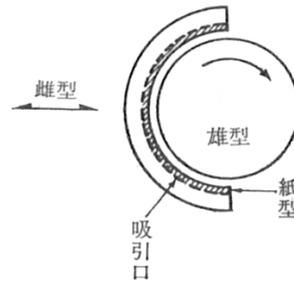


半自動鉛版鑄造機

このような自動鑄造機は雌型と雄型の二つの部分で構成される。雄型は軸(シリンダー)を中心に半回転ずつ回転し、雌型(ボックス)は水平のガードレール上を前後に移動する。雌型が雄型から離れた位置で紙型を紙面の縦方向に雌型に挿入し、両側のクリップで挟んで固定する(後には紙型を裏面から真空吸引するようになった)。雌型が雄型に近接した定位置にセットされると、二つの型の間にポンプで地金を注入する。地金は版となる部分の上部まで注入され、その重量による押圧で紙型の細部まで地金を行き渡らせる。両方の型には冷却水が通っていて鑄造後に地金を冷却し、凝固が終了するとボックスを後退して開き、ハンドルでシリンダーを半回転させる。この際にカッターで上部の不要部(贅片)を切り離し、鉛版の縁を仕上げる。手動機では一旦紙型をセットしたら後は連続的に鑄造が可能になった。

なお雄型の表面の鉛版の裏面となる部分には多数の溝(蛇腹)が円周方向に切られている。これは冷却効果を高め、鉛版を雄型に付着させると共に、鉛版の重量軽減、強度向上、歪みの減少を図り、さらに輪転機の版胴への

密着を良くするためだ。



半自動鉛版鑄造機の機構概要(上部から見た状態)

鑄造後の鉛版は鉛版仕上機(シェーバー)で裏面を研削し、所定の厚さに仕上げられる。

国内の鉛版鑄造機メーカーでは、1931年(昭6)に大阪朝日に金田機械製作所が、1935年には都新聞用に中島機械工業が半自動機を納入したとの記録がある。

高速輪転機以降の一般的な鉛版の諸元

重量：17～18kg

厚さ：11.25mm

成分：*活字用地金とほぼ同じ三元合金
鉛77～84%、錫4～8%、アンチモン12～15%

地金リサイクル率：70～90%

耐刷力：5万インプレッション程度

【参考文献及び引用図版】

1. 新聞印刷・印刷編(日本新聞協会 昭37)P17右上図、P18右図を引用
2. 印刷術・下巻(矢野道也・丸善 大6) P16図を引用
3. 毎日新聞百年史(毎日新聞社 昭47)
4. 印刷術入門(馬渡務・日本印刷学会出版部 昭30) P17左図を引用
5. 新聞印刷工場論(江崎達夫・新聞之新聞社 昭7) P18左図(一部加筆して引用)
6. 朝日新聞印刷読本(朝日新聞社 昭19) P17右下図を引用

次回は三宅順(日経OB)が太平洋戦争終結までの新聞製作技術 用紙・インキ編を説明します。

あれ これ わが職場

玉手箱を開けた浦島太郎

西日本新聞社 製作センター技術部長 三嶋 文昭

1980年当時の印刷課に入社した私にとって18kgの鉛版を使用していた凸型輪転機や軽量刷版、PS版を利用した輪転機までの知識しか持っていない。そんな私が異動で19年ぶりに製作センター(以後センター)の技術部に戻ってきた。センターでは稼働している三菱製4×1(ダイヤモンドスピリット)輪転機2セット、三菱製4×2(ダイヤモンドスペース)1セット、三菱製NS機2セットと休止している1987年製seikenと池貝ゴス輪転機にhamada製折機を使用したハイブリット型やゴスと三菱とのハイブリット型が鎮座している。これらの機器にはこれまで在籍してきた技術部員が日々、安全・紙面・店着のスローガンの基、保守管理を粛々と行ってきた歴史がある。

14名の技術部員のうち9名とは新聞製作部(旧印刷課)で一緒に仕事をしたことがあり、違和感なく職場に溶け込むことはできた。しかし、輪転場内のインクの匂いは変わらないが、稼働している輪転機を見て愕然としてしまった。給紙部では巻取り紙を機械仕立てして自動で装着し、輪転部では各プレス、タワー機ではスタックごとに版掛け作業、断ち切り合わせは自動で、機付けにいたっては当時では考えられない要員で運用をしている。19年の月日が詰まった玉手箱を開けてしまった浦島太郎になったような気分だった。

そんな浦島太郎にとってストレスも多いが、次なる輪転機更新という大仕事が控えている。気を引き締めて直して頑張りたい。

ゴルフ雑感

(株)道新総合印刷 業務本部長 吉田 嗣博

イランカラブテ(アイヌ語で“こんにちは”)。弊社工場がある北広島市は、札幌農学校の初代教頭クラーク博士が「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の言葉を残し去った地、そして中山久蔵が北海道で初めて米作りに成功した地でもあり、歴史ある街です。

北広島市のもう一つの顔としてはゴルフ場が非常に多いことです。市内には8カ所のゴルフ場があり、同市の面積の1割を超えています。ANAオープンが開催される札幌ゴルフ倶楽部輪厚コースや明治チョコレートカップの札幌国際カントリークラブ島松コースなど名門コースが目白押し、まさしくゴルフ銀座です。

北海道もそろそろゴルフシーズン到来です。私事で恐縮ですが、某製紙会社系列のゴルフ場で毎週腕を磨いてきましたが、エイジングには勝てずスコアは下降の一途です。体力自慢の工場勤務の猛者達と一緒にでは煩惱が邪魔をし、ゴルフ道も道半ばです。

北海道は海外からの観光客呼び込みに力を入れています。ゴルフ場への参上はちょっと待ってほしいものです。昔日、害人プレーヤーが殺到し、一ホールごとの掛金精算のため遅プレー、ティーランドをはじめコース内での放尿、果てはバスタオルを巻いての入浴、キャディーに言わせれば二度とおもてなししたくない、とのぼやきの声も。ゴルフはマッサンの妻リタが生まれたスコットランド発祥のスポーツ、野心・野望は自然豊かな北海道には似合いません。

第39回国内研修会記

信濃毎日新聞社 塩尻製作センター見学

第39回国内研修会が、2月20日信濃毎日新聞社塩尻製作センターで開催され、事務局および日本新聞協会1名を含む総勢25名が参加しました。

同センターは『新印刷空調システムの実用化・輪転機結露ゼロへの挑戦』で2013年度新聞協会賞「技術部門」を受賞されております。今回は主にこのシステムを見学しました。このシステムの特徴は輪転機セット毎に空調機から電動機盤までダクトで繋ぐ事できれいな空気を送り込み、ミスト侵入と温度上昇を防いで電子部品を保護する。電動機盤で暖められた空気は印刷ユニットの版胴付近に送り、結露を防ぐ。輪転機内を通った高温、多湿な空気は工場内に拡散させず局所排気をするという給排気のルート設けた事にあります。これにより電子部品の長寿命化、結露による水垂れを防ぎ損紙の削減、冬場は排熱を建屋空調に再利用で空調コストの削減という効果が得られます。またこのシステムは省エネになるので設備投資分は8年で回収できると伺いました。



空調をシステム化することで二重三重の効果をえられる事に非常に感心しました。

センター内の見学では、印刷局長宮沢秀紀様、印刷部長神林寿享様、印刷部長早川和利様、総務局施設管理課長小沢豊明様の案内で

常に丁寧な説明をして頂きました。

給紙フロアでは2008年に弊社の納めたADSが稼動しているところも見学できました。

見学会の後の懇親会では、引き続き宮沢局長様、神林部長様、早川部長様、小沢課長様にご参加頂き中華料理に舌鼓を打ちながら時の経つのも忘れて親睦を深めさせて頂きました。懇親会に際しましては『大信州 槽場詰め』を賜りました。こちらは限定品で地元でも入手困難と伺いました。最後になりますが大人数での工場見学に際しては、同センターの皆様にご多大なるご配慮を頂き心より御礼申し上げます。

【株樺本興業 米村 卓雄 記】

第3回CONPT技術研究会開く

発足以来3回目となるCONPT技術研究会を、3月6日(金)午前11時からプレセンター内会議室で開いた。「トッランナーモーター」というホットなテーマで、前2回を大きく上回る58人の聴衆を集めた。うち新聞社製作技術関係の方が26人を占め、印刷工場を抱える各社の関心の高さをうかがわせた。

林企画副委員長の進行で、樺本チエイングループのツバキE&M社・減速機技術部主任中谷真之氏のレクチャーを受けた。同モーターは経産省の政省令改正で、2015年4月から新規国内出荷分について採用が求められている。わが国産業部門の消費電力量の75%を占めるモーターの省エネを目的に、モーター各社が開発した経緯や性能が披露された。たとえば、1.5KWモーター1基を1日16時間、300日使用したとすると電力コストは年間約8,170円の削減になるという。新聞印刷工場は、輪転機や発送機器を中心に多数のモーターを使用しているとあって、CONPT会員社のメーカー、サプライヤーの方々も熱心に聞き入っていた。 (事務局)

会員消息

■担当者変更

*サカタインクス(株)(4月1日付)

[新]黒崎 彰夫氏

(新聞事業部東京営業部長)

[旧]武田 勉氏

(新聞事業部制作技術担当部長)

*NECエンジニアリング(株)(4月22日付)

[新]緑川 葉一氏

(第二システムプラットフォーム事業部メディアターミナル開発部マネージャー)

[旧]本田 義行氏

(インターネットターミナル事業部事業推進主任)

*西研グラフィックス(株)(4月17日付)

[新]小池 享氏

(東京支社東日本営業部部長代理)

[旧]下田 守樹氏

(東京支社長)

■登録名称変更

*東芝ソリューション(株)は、4月1日より

(株)東芝インダストリアルICTソリューション社に登録名称を変更しました。

■所在地変更

*DICグラフィックス(株)(5月7日付)

(〒103-8233)

中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル
TEL、FAX番号は変更ありません。

JANPS2015

セミナー開催のお知らせ

今回も、会場内にセミナーゾーンを設け、出展社の主催によるセミナーと、CONPT主催のセミナーを開催します。今回は、大小2つのセミナーゾーンを用意し、より多くの出展社に利用いただけるようにしました。

セミナーは、22日(初日)は10時45分から、23日(2日目)と24日(最終日)は、10時15分から開催します。23日の午後は、新聞協会主催の新聞製作講座開催予定のため、午前中のみ開催、他は全日開催します。既に、出展社20社による、計28プログラムの開催が決定しており、JANPS公式ウェブサイト(<http://www.janps.jp/seminar.shtml>)でスケジュールを確認いただけます。

また、22日と24日には、こちらもJANPSの恒例となった、CONPTセミナーを開催します。CONPTセミナーのテーマについては、現在選考を進めていますので、決定し次第、前述のJANPS公式ウェブサイトや懇話会報でお知らせします。

なお、CONPTセミナーは、当日の混雑防止のため、事前申込制をとっています。テーマが決定し次第、聴講申し込みの受付を開始します。(当日空席がある場合は、事前申し込みされなかった方も聴講できます。)

JANPS見学と合わせ、多くの皆様の聴講をお待ちしています。

CONPTツアー合同再会パーティー開催のご案内

—JANPS 第2日、23日(木)午後5時から—

今回も7月22日(水)から開催されるJANPSの会期にあわせ、CONPTツアー参加者による「第4回CONPTツアー合同再会パーティー」を下記の要領にて開催致します。

万障お繰り合わせの上、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

なお、案内状は、6月上旬発送予定です。

開催日時	平成27年7月23日(木) 午後5時～7時
場所	THE BIG LOUNGE (ビッグサイト北コンコースレストラン街)
参加費	3,000円
お問合せ先	日本新聞製作技術懇話会 Tel:03-3503-3829

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (40社) 平成27年5月15日現在

社名	〒番号	所在地	連絡先
(株)インテック	136-8637	東京都江東区新砂1-3-3	03-5665-5097
NECエンジニアリング(株)	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131	04-7185-7614
(株)加貫ローラ製作所	544-0005	大阪府大阪市生野区中川5-3-13	06-6751-1121
(株)KKS	555-0011	大阪府大阪市西淀川区竹島4-11-54	06-6471-7771
(株)金陽社	136-0082	東京都江東区新木場1-1-1王子木材緑化ビル1F	03-3522-3600
クオード・テック・インク日本支店	336-0034	埼玉県さいたま市南区内谷3-11-26	048-839-8831
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)	105-0023	東京都港区芝浦1-1-1浜松町ビルディング	03-6311-9061
コダック(同)	140-0002	東京都品川区東品川4-10-13KDX東品川ビル	03-6837-7285
(株)ゴス グラフィック システムズ ジャパン	350-1328	埼玉県狭山市広瀬台2-5-15	04-2954-1141
サカタインクス(株)	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
清水製作(株)	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
ストラパック(株)	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
西研グラフィックス(株)	110-0016	東京都台東区台東4-29-15 上野永谷タウンプラザ213	03-5812-3681
第一工業(株)	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
DICグラフィックス(株)	101-0063	東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル	03-6733-5067
田中電気(株)	101-0021	東京都千代田区外神田1-15-13	03-3253-2816
椿本興業(株)	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル30階	03-6718-0151
(株)椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
東京インキ(株)	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7625
(株)東京機械製作所	108-8375	東京都港区芝5-26-24	03-3451-8172
(株)東芝インダストリアルICTソリューション社	212-8585	神奈川県川崎市幸区堀川町72-34 スマートコミュニティセンター15階	044-331-1097
東洋インキ(株)	104-8378	東京都中央区京橋2-7-19 京橋イーストビル8・9F	03-3272-0721
東洋電機(株)	480-0393	愛知県春日井市神屋町字引沢1-39	0568-88-6401
東和電気工業(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
ニッカ(株)	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21	03-6667-1111
日本アグファ・ゲバルト(株)	141-0032	東京都品川区大崎1-6-1 大崎ニューシティビル1号館5階	03-6420-2010
日本新聞インキ(株)	108-0075	東京都港区港南1-8-27	03-3450-5811
日本電気(株)	108-8001	東京都港区芝5-7-1 NEC本社ビル	03-3798-4666
日本ボールドウィン(株)	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階	03-5418-6121
パナソニックシステムネットワークス(株)	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地	045-938-1613
(株)日立製作所	140-8573	東京都品川区南大井6-26-3	03-5471-2141
富士フィルムグローバルグラフィックス(株)	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フィルム西麻布ビル	03-6419-0421
富士通(株)	105-7123	東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士薬品工業(株)	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正(株)	112-0004	東京都文京区後楽2-3-19 住友不動産飯田橋ビル4号館8F	03-5803-6600
三菱重工印刷紙工機械(株)	144-0033	東京都大田区東糀谷4-6-32	03-3744-2951
三菱製紙(株)	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア	03-5600-1475
ミューラー・マルチニジャパン(株)	174-0042	東京都板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業(株)	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621

CONPT